

# 『教育者としての ショーペンハウアー』から

——ニーチェと自然——

河内信弘

## 1

ニーチェは、はじめ文献学の道を歩み始め、後にその道を捨てることになるのだが、文献学を専攻した一つの理由を次のように述べている。

「なんと言っても運がよかったのは、私があたの学校で立派な文献学関係の先生方に出会ったということである。この先生方の人柄からして私は先生方のやっている学問がどんなものであるか判断したのである。」<sup>(1)</sup>これは文献学を専攻した理由の一つにすぎないのは言うまでもないが、人間からその人間の専攻するものを判断したことは注目すべきであろう。

ショーペンハウアーとの出会いは、いわばこの逆、著作との出会いであり、そこから、ショーペンハウアーその人を学ぶのである。ショーペンハウアーの叙述を追うのではなく、そこから得られるショーペンハウアーの人間を追うのである。

「私はショーペンハウアーが私に与えたいわば生理学的第一印象、最初のほんのわずが触れた際に生ずる或る自然産出物 (Naturgewächs) の最内奥の力の、他の自然へのかの魔術的流出、これ以外のものを何も叙述していない。」<sup>(2)</sup>

ショーペンハウアーを自然そのものとするのである。ところで、書物として出会ったのは大きな欠点であると、ニーチェは言うけれど、そこには生きて

いる人間への、現に生きている人間への渴望，期待がうかがわれる。ショーペンハウアーの著作に出会う頃，ニーチェにとって生は謎のようにばらばらなものであり，彼自身寄る辺なく，希望もなく，楽しい思い出となるものを一つとして持っていなかった。人間は暗く覆れ，自分自身を掘り起して自分を発見するのは辛く危険であることを見て取り，一方人々には臆見と恐怖にしばられ，自分自身であろうとはしない姿を見て取っていた。

「自己を発見し，通例どんよりした雲のなかを漂っていることを麻酔から我に帰る<sup>(3)</sup>」ことを教えた人間の一人がショーペンハウアーであった。ニーチェは自分自身を教育することの怖ろしい労苦と義務を取り除いてくれる教育者としての哲学者を求めていたのであり，そのような哲学者をショーペンハウアーに見出したのである。しかし，「義手義足蠟製の鼻や眼鏡をかけた眼<sup>(4)</sup>」を求めていたのではない。自分自身を解放するものを求めていたのである。ショーペンハウアーに，一個の調和的人間を，自分自身に従って自由に行動し，捉われることもなく，何ものにも妨げられることのない自然物（Naturwesen）を見出すのである。それが自分自身を解放することでもある。

ショーペンハウアーから得た「生理学的第一印象」を，自然産出物の最内奥の力の流出を，正直（Ehrlichkeit），晴朗（Heiterkeit），恒常性（Beständigkeit）とに，ニーチェは分析する。正直さとは，自分のために書くことであり，「誰をも欺くな，決して汝自身をも欺くな！<sup>(5)</sup>」ということであり，ショーペンハウアーの文体を次のように述べている。

「語り手の力強い快感が彼の声の最初の調べを聞いただけでわれわれを包む。これは喬木の林に踏み入ったときの気分似ており，われわれは深呼吸し，突然快い感情を取り戻す。ここにはいつも変わらぬ元気づける空気があると，われわれは感ずる。（中略）模倣し難い素直さと自然さ（Natürlichkeit）<sup>(6)</sup>を感ずる。」次ぎに晴朗さに関しては，極めて困難なことも思惟よって征服するからだとし，

「真の思想家は，その真面目さを表現するにせよ，その諧謔を表現するにせよ，あるいはその人間的洞察を表現するにせよ，その神的な思い遣りを表現す

るにせよ、いつでもひとを晴れやかにし元気づけるのであり、不機嫌な表情をせず、手をふるわせず、眼に涙を浮かべず、それとは反対に確信があり、単純で、勇気と強さを伴い、おそらく多少騎士的で厳しいが、しかしいずれの場合にも勝利者として振舞う。<sup>(7)</sup>」そしてここに内面的に晴れやかにするものを見出す。

「これら勝利者は真に語り、吃らず、また口真似して喋らない、彼らはありのままに動き、生き、一般に人々が生きるのを常とするように無気味に仮面をつけて生きるのではない。それゆえ、彼らのそばにいると本当に人間的または自然的<sup>(8)</sup> (natürlich) 気分になり……」と述べる。

さらに恒常性について次のように述べている。これも註(9)のように自然と深い関係がある。

「彼は恒常的だ、なぜならかくあらざるをえないからだ。<sup>(9)</sup>」

喬木の林に踏み入った時の気分、自然的気分というような表現を、唯比喩ととらえるだけでは十分ではなかろう。風景とも、あるいは人間の外部にある自然から得られるものと、それらは言えようが、その感動は、ニーチェには深い意味があると思われる。<sup>(10)</sup>人間を見出すことが自然と深い関りを持ち、ショーペンハウアーの場合その関りを特徴づけるとき、外部にある自然から得られるものをもってするのは興味深い。

## 2

「如何にしてわれわれはわれわれ自身を再発見するか？ 如何にして人間は自己を知りうるか？ 人間は暗い覆われたものである。そして、兎が七枚の皮をもつならば、人間は七の七十倍脱皮しても、『これこそ現実に汝であり、これこそもう外皮ではない』とまだ言うことはできないであろう。<sup>(11)</sup>」

更にニーチェは人間の本質が人間の中に隠されているのでなく、自我と呼ばれるものの上に高く位するものとする。人間の本質のまことの根源的意味と根本素材をなすもの、それは教育されるものでも、形成されるものでもないとするのである。

「教養 (Bildung) は義手義足や蠟製の鼻や眼鏡をかけた眼を授与するものではない (中略)。教育とはかかるものではなく解放であり、植物の軟い芽を侵害せんとするすべての雑草や瓦礫や虫類の除去であり、光と熱の放射であり、夜の雨の情深い降りそそぎである。教養は、自然が慈母のような憐み深い心を抱いている場合には自然の模倣であり崇拝であるが、自然の残酷無慈悲な攻撃を予防し、自然を善に向ける場合、自然の継母根性と悲しき無理解をヴェール<sup>(12)</sup>で覆う場合には自然の完成である。」

自己を作り上げることつまり教養と自然との関連、自然の模倣、崇拝、完成と見ようとするのである。ニーチェにとって自然という問題は極めて大きな意味を持っているのである。

人間と神と世界あるいは自然の問題はニーチェにとって大きな問題である。後年「神は死んだ」と言い切ることになるのだが、神の死の問題は早くからニーチェの内に横たわっているのである。「教育者としてのショーペンハウアー」では次のように述べている。

「キリスト教はその理想の高さによって古代の道德体系と万人を一様に支配している自然性 (Natürlichkeit) とを大いに凌駕してしまったので、人々はこの自然性に鈍感となり、それに嫌悪を感じずるようになった。しかもその後、より善きものと高きものをまだ認めるには認めたが、しかしそれをもはや実行しえなくなった時、あの善きものと高きもの、つまり古代の徳へ帰ろうと如何に意欲しても、帰ることはもはや不可能であった。このように、キリスト教的なものと古代的なものとの間を、道德の畏縮したあるいは虚偽のキリスト教化と、同様に氣力の欠けたおずおずした古代化との間を往きつ戻りつしながら近代人は生活し、思わしくない状態にある。自然的なもの (Natürliches) に対する先祖伝来の恐怖、他方この自然的なものの再興された魅惑、どこかに支えをもちたい欲望、善なるものとより善きものとの間をかなたこなたへとよるめく近代人の認識の無力さ、これらすべてが近代人の魂のうちに不安と錯乱を生み出し、この状態が魂に実りを得させず喜びを味わさせないという刑罰を科するのである。」<sup>(13)</sup>

自然性の支配する古代社会、自然的世界を取り戻そうにも、キリスト教によっ

て失われてしまっているのであるが、現実には「中世の氷の流れのなかに生活し<sup>(14)</sup>ている」姿であり、その氷は融け、荒廃をもたらす巨大な動きがある。

ニーチェは人間の再興をキリスト教の再興のなかにみるのではなく、古代の自然的世界を思いつつ、現にある自然を見ようとする。自然との合一を目差そうとする。そこで教養 (Bildung) の問題を、自然との関連でみようとするのである。模倣すべき、崇拜すべき自然を自己の前に立て、自然の失敗作としての人間を、完成させようという目標を、自己の形成の、教養の目標として打ち建てるのである。歴史の荒廃したところに立ち、その荒廃の原因をキリスト教に見、自然と直接結びつくことを、自然の声を聞きとることを目標とするのである。歴史の地盤の上に立つのではなく、歴史の地盤の崩壊しているところに立っている。

ところで崩壊した地盤はキリスト教の地盤であり、キリスト教はその本質上自然を捨てることにあったのである。ニーチェが自然を考える時、その難しさの一つはそこにあったのかも知れない。

人間の自然に関してニーチェは次のように「道徳外の意味における真理と虚偽について」の中で言う。

「人間は自己自身について何をしっているのであろうか！ 実際、人間は、明るく照らされたガラス箱の中にでも寝かされているように、完全に自分自身のことを知覚するなどということが一度でもできたことがあっただろうか？ 自然 (Natur) は彼に、最もありふれたことさえも、自分の身体に関してさえも、沈黙して語らないではないか、そしてその結果、内臓のうねりや血行の急速な流れや錯綜した筋の慄えをよそにして、彼を傲慢な詐欺的な意識の中に封じ込め、閉じ込めようとするのである。自然は鍵を投げ棄ててしまったのである。」<sup>(15)</sup>

人間は自然のなかから生れたものである。ニーチェは自然は人間を待ち焦れ、人間を努力して獲得したのであるが、その自然は人間を解く鍵を人間には与えてくれなかったと言うのである。人間は真理を発見したと傲慢に語るけれど、「真理とは錯覚なのであって、ただひとがその錯覚であることを忘れてしまったような錯覚なのである。」<sup>(16)</sup> そのような錯覚に陥っている間に、人間は動

物性を抜け出せず、無意味に悩み、野蛮化、衰弱した人間となって行く、古代の持っていた自然性を捨て、自然のもっともいやらしい被造物となって行く。近代人は悲惨な状態に陥っているとニーチェは見るのである。

近代生活の画像をニーチェは二つあげる。

「われらの上には冬の日がある。われらは高山に住む、危かしく、乏しさのうちに、喜びはいずれも短く、白い山々にかかって、われらの方へ忍びよる日の光はいずれも蒼白だ。そこに音楽が響き、ひとりの老人が簡琴を鳴らし、踊り手が踊り廻る——旅人はこれを見て心を乱す。すべてはかくも荒涼として、かくも閉ざされ、かくも色褪せ、かくも望みがない。そして今やそのなかに喜びの響きが、思想のない騒々しい響きが聞こえるとは！ しかし既に早くも夕霧が忍びより、響きは響き止み、旅人の歩みは軋む、見渡しうる限り彼の見るものは自然 (Natur) の荒れ果てた残酷な面<sup>(17)</sup>だけだ。」

「確かに力、巨大な力は現存するが、それは荒々しい原始的な、完全に無慈悲な力である。われわれは魔女の厨の泡立つ釜をのぞき込むような不安な期待<sup>(18)</sup>をもってその力をながめる。」

第二の画像に関して具体的表現を引用してみると、

「われわれは全自然 (alle Natur) と共にわれわれ自身がわれわれの頭上に聳え立つ或るものに向うがごとくに人間に向って押し寄せて行く有りさまを見る。(中略) 洗練された猛獣どもが走り、その真中にわれわれも走っている。広大なこの世の沙漠における人間どもの物凄い激動、彼らの都市造り、国造り、彼らの戦争、彼らの絶え間ない蓄積と散財、彼らの入り乱れて疾走し、相互から習得する有さま、彼らの相互欺瞞と相互蹂躪、苦難における彼らの叫喚、勝利における彼らの喜びの咆哮——これらはすべて動物性の継続であるが、あたかも人間が作り返され、その形而上学的素質が騙し取られているかのようであり、いなそれどころか、あたかも自然 (Natur) がかくも長らく人間を待ち焦がれ、人間を努力して獲得してきた後で、今や人間から尻込みし、むしろ再び衝動<sup>(19)</sup>の無意識状態へ戻りたがっているかのようである。」

近代生活からニーチェが見い出したものは、強い面にしろ、弱い面にしろ、

自然の荒れ果てた残酷無慈悲な姿なのである。自然は人間を作った。しかしその時自然の残酷無慈悲な面を取り除くことは出来なかった。おまけに鍵を捨ててしまったのである。人間の側では動物性を克服するのではなく、むしろ動物性を継続せしめていったのである。いわば「自然の残酷無慈悲な攻撃」に従って来たことになる。しかも「善きもの」、「高きもの」である古代の自然性を捨てることによって、そうして来たことになる。これらのことを克服すること、そこに自然の完成という課題の意味があると思われる。

## 3

自然の完成、逆にいえば完成すべき自然が比較的分かりやすいのに比して、完成された自然、模倣、崇拜すべき自然は極めて分りにくい。肯定しようとするのが、限りなく否定に通じ、徹底した否定となり、そして複雑さを増して行くことになるのだが肯定すべきもの、つまり自己の中で直感し、確信しているものが、実はなにか単純なものであり、あまりにも単純なものであり、ニーチェ自身それを言い表わすことに成功しないものであったとは言えないだろう<sup>(20)</sup>か。「意志と表象との世界」は

「自然というものは結局のところ

究められないのではなからうか。」

というゲーテの言葉をもって始まるのである。ニーチェは自己形成の問題を自然との関係で見る。ゲーテですら自然は究められないのではなからうかというその自然を自己形成、教養との関係でみるところに、ニーチェの或る確信があると見るべきであろう。その或る確信とは単純なものでであろう。「意志と表象との世界」の第一版の序文の冒頭に次のような言葉がある。

「——この本によって伝えられるものはたった一つの思想である。それにもかかわらず、いくら苦勞しても、それを伝えるのにこの本全体より短い道は見つけられなかった。<sup>(21)</sup>——」

単純なものが複雑さを呼ぶというは逆説ではない。小林秀雄は「ニーチェも亦夥しい硝子の組合はされた、驚くほど明るいレンズである。たった一つの有

機的思想を信ずるものは、そうならざるを得ない。」<sup>(22)</sup>と言うのである。

ニーチェが言う模倣すべき自然、崇拝すべき自然は大変分りにくいのであるが、模倣、崇拝すべき自然のイメージを二個所見い出すことが出来るように思う。そのイメージに到るまでをたどった後に、そのイメージを考えてみたい。文化の課題を、哲学者、芸術家、聖者を生み出し、それによって自然の完成に従事することであると、ニーチェは考えているが、ショーペンハウアーを、そして一般的に哲学者、芸術家、聖者について述べる時、その二つのイメージがあらわれる。そこでまずショーペンハウアーについての叙述を整理しつつ、そのイメージを考えてみたい。

ショーペンハウアーが成長するに際しておかれた危険を三つニーチェはあげる。孤独と、真理への絶望と、自己の稟性、倫理的意欲に限界のあること、この三つである。孤独は如何なる犠牲を払っても、自己の哲学を同時代の人々の無視から守り通そうとする故に生ずる。真理についてニーチェは次のように述べている。

「真理とは何なのであろうか？ それは隠喩、換喩、擬人観などの動的一群であり、要するに人間的諸関係の総体であって、それが、詩的、修辭的に高揚され、転用され、飾られ、そして永い間の使用の後に、一民族にとって、確固たる、規準的な、拘束力のあると思われるに到ったところのものである。真理とは、錯覚なのであって、ただひとがその錯覚であることを忘れてしまったような錯覚なのである。」<sup>(23)</sup>

人生の全体像という絵を描くために用いられた絵具やキャンバスを綿密に研究し人生の解釈に近づこうとするなら、絵具は化学的に測りがたいものになり、キャンバスは全く複雑に織られたものという結論になるだろう。それにもかかわらず、絵具やキャンバスを研究すれば、人生が、真理が分るとするのは誤りであり、錯覚なのであり、ショーペンハウアーは、そのことを知っており、彼は絵を理解するためには、画家のことを推し測らなければならないことを知っていたとニーチェは述べる。これが真理への絶望であり、また真理への絶望に対処するショーペンハウアーの態度であるとするのである。



第三の危険は、ショーペンハウアーの強い自然への憧れが、自分自身への憧れであり、自分の内に天才（Genius）を認めながら、一方激しい憧憬を、深い神聖性に憧れを抱いたことであるとするのである。この憧れによって、ショーペンハウアーが破壊もされず、硬化もきたさず、自己を保ち得たとし、このことにニーチェは驚きを見い出すのである。

このようなショーペンハウアーをルソーとゲーテとともに近代のなかから選び出し、比較する。しかもルソーの人間、ゲーテの人間、ショーペンハウアーの人間として。そしてそこに人間が、自分の生を光明で満そうとする衝動を得るものとして。ルソーの人間は「『自然（Natur）だけが善だ、自然人（der natürliche Mensch）だけが人間だ』と叫ぶとき、彼は自己を軽蔑し、自己自身を越えて憧れる。<sup>(24)</sup>」自然（人）だけを肯定し、他の一切を否定する人間であるとする。ゲーテの人間は高次の様式における、一步誤まれば俗物に墮ちる危険を持っているのであるが、静観的人間であり、過去に存在したもの、現に存在する偉大な考察に値するものを己れの生の種として集める「保存的調和的な力」<sup>(25)</sup>とするのである。真実のものを隠さず、否定すべきを否定すればもっとよくなるであろうとするのである。ショーペンハウアーの人間は否定される存在をすべて否定し、およそ否定されえず、真実であり、虚偽のない存在を信ずるといふ誠実、この誠実という苦悩をみずから負う人間であるとする。「この苦悩はこの人間にとって己れの我意を滅し、生の本来の意味がそこへ導かれるところの己れの本質のあの完全な変革と顛倒を準備することに役立つ。」<sup>(26)</sup>そしてショーペンハウアーは「私は私のものであり続けよう」<sup>(27)</sup>と決心するのである。

「彼は今や一連の異常な問いを口もとに浮かべながら、生存の深みへ沈潜して行かなくてはならないからである。何故に私は生きるのか？ 人生からどういふ講義を学ぶべきなのか、どうして私は現に存在するときものとなったのか？ いったい何のために現にかく存在することに悩むのか？」<sup>(28)</sup>

人々はこのような問いに悩むことなく、自分自身を思うことなく、自己の生活を、自己の生を時代、あるいは国家、あるいは学問の発展のなかのある一点としか理解しない。そして彼の生存を生成の出来事、歴史に組み入れるのであ

るとする。これは、自己忘却の虚偽の人形芝居であり、時が、「われわれと共に演ずる愚直の遊戯である。」<sup>(29)</sup>「人間の解くべき謎、これを人間はただ存在から、このようであって、他のようではなく存在することにおいて、過ぎ去らぬものにおいて解きうる。」<sup>(30)</sup>とニーチェは言う。つまり生成の戯れの道具であってはならないとするのである。「英雄的人間は自分の幸運や不運、自分の徳と悖徳、一般に事物を自分の尺度で測ること、これを軽蔑し、もはや自身について何事も希望せず、すべての事物においてそのような希望を抱かせなくなる奥底まで見ようとする。」<sup>(31)</sup>こうして生きるとき、迷妄を醒ましてくれる奇蹟が与えられるとするのである。ここに一つのイメージがあらわれる。

「幸福も真理もその偶像的模写にすぎぬところの何か名状し難いものが彼に近づき、地球はその重力を失い、地上の事件と権力は夢のようになり、夏の夕におけるような聖化の光明が彼の周りに拡がるのである。これを観る者には、まるで今まきに見覚めたごとく、消え果てぬ夢の雲だけがなお身の周りに戯れるごとくに思われる。この雲もやがて吹き払われるであろう。その時は昼である。」<sup>(32)</sup>

「夏の夕におけるような聖化の光明」というイメージがそれである。「昼」のイメージは別の機会に触れることがあるであろう。

更にもう一のイメージを追ってみよう。

無意味に悩む動物として人間、失敗した自然としての人間を持ち上げる人間として哲学者、芸術家、聖者をあげる。

「自然 (Natur) は哲学者を必要とすると同様に芸術家を必要とするのであり、これは一つの形而学的目的のため、すなわち自然それ自身に関する啓蒙のためであり、自然がその生成の動揺中には決して判然と見るを得ないものを遂にはいつか純粋な完成した形像として自身に対置するためであり——したがって自然の自己認識のためである。」<sup>(33)</sup>と哲学者と芸術家に関して述べる。特に芸術家に関しておよそ次のように述べている。芸術家は自然が吃りながら言うことを推測し、自然を途中で出迎え、自然が試みようとしている本来の意図を言い表わしてやるのであり、そのことによって、自然の試みが、自然にとって価

値を持つのだと。そして自然は最後に聖者を必要とするとし、次のように述べる。

「聖者において自我は完全に融けて無くなり、その悩める生は個人的には全くあるいはほとんどもはや感じられず、すべての生ける者における最深の同等・共同・一体の感情として感じられるようになる。聖者において、生成の戯れの決して思いつかないあの変化の奇蹟、全自然 (alle Natur) がそれ自身の救済のために押し寄せて来るあの最終的にして最高の人間化が現われ出るが、自然はこの聖者を必要とするのである。<sup>(34)</sup>」

これがニーチェの言う哲学者、芸術家、聖者である。そして、

「彼らの出現に際して、彼らの出現を通して、決して飛躍しない自然 (Natur) が唯一の飛躍をする、しかも歓喜の飛躍をする、というのは、自然は初めて目標に到達したことを、すなわち自分が目標をもつことを忘れなくてはならないことを悟り、またこれまで生と生成の勝負事をあまりにも多額の賭金でやってきたことを悟る場所に到達したことを感ずるからである。自然はこの認識によって光明で満たされ、そして一種の穏和な夕の疲れ、人々が『美』と呼ぶものが自然の顔前に宿る。今やこの光明で満たされた風貌を具えて自然が発言するもの、それは生存に関する啓蒙である。死すべき者人間が望みうる最高の願望は絶えず耳を開いてこの啓蒙に与ることである。<sup>(35)</sup>」

と述べるのである。

ここに、「夏の夕」と類似の表現と思われる「夕の疲れ」という表現を見出すことが出来る。前者の「夏の夕」は人間が、物事を徹底として見ようとする、その時にあらわれるものとして描かれているのに対して、つまり人間が自然を得たと思われる時にあらわれるものだが、「夕の疲れ」は自然が人間を求め、求める人間を得た時に、あらわれるということになる。自己形成つまり教養の目的をニーチェは自然の完成と、自然の模倣、崇拝と表現しているが、完成した自然のイメージと、模倣、崇拝すべき自然のイメージが「夏の夕」、「夕の疲れ」と重なり合うといえるだろう。

夏の夕、穏和な夕の疲れといったものが、ニーチェの骨核にとどいていると

するならば、<sup>(36)</sup>肯定すべき自然というもののとらえ方は、自然の美しさ、夕方の気分というのはニーチェ独特のものであろうが、その美しさに自然というものを理解する鍵を見ているのではなからうか。ニーチェは自然の中に詩を感じる芸術家としての面を持っている。ベルトラムは「ニーチェ」<sup>(37)</sup>の中で晩夏と題する章で、「窓の外に思想に満ちた秋が」を中心におきつつ、ニーチェの生れながらの秋めいた性質を見事に描いている。

否定さるべきは否定する鋭さの中に、自然を完成するという考えは貫き通されているが、それにもかかわらず、完成された自然、模倣、崇拜される自然の姿はさだかではない。哲学者、芸術家、聖者が自然を実現しているといい、また彼らを生み出すことによって、自然の完成という文化の課題を実現しなければならぬと言うけれど、そのことには変りはない。しかし、夏の夕、夕の疲れという具体的な自然の姿が、それらと結び合わされていることは言えよう。

『かつて或る思想家が登ったほど高く登り、アルプスと氷の澄んだ空気のなかへ、そこではもはや霧のかかることもヴェールで覆われることもなく、事物の根本性質が粗く硬く、しかし避けようのない分かり易さで表現されているところへ登ることができるならば！ このことを思うだけでも魂は孤独となり無限となる。魂の願いが叶えられ、いつか眼差しが事物の上に光線のように急傾斜して輝いて降りゆき、羞恥、気遣い、渴望が死滅してしまふことがあるとすれば——魂の状態、興奮を伴わぬあの新しい謎のような感動を名づける言葉が果してあるだろうか、この感動をもって魂はショーペンハウアーの魂と同様に生存の巨大な象形文字の上に、生成の石と化した学説の上に、夜としてでなく、燃えあがる、赤色の、世界に溢れる光として拡がって存在し続けるだろう。』<sup>(38)</sup>

夏の夕、夕の疲れとは思想に満ちた秋に近く、アルプスと氷の澄んだ空気とは、違った気分であるが、思想に満ちた秋や事物の根本性質が避けようのない分かり易さで表現されている自然の情景から受ける感動、その感動に重きをおいている。いやむしろ自然の情景のなかに、思想が、事物の根本性質が避けようのない分かり易さで表現されていると考えるニーチェの思想が浮び上ろう。もちろん、これをもってニーチェの全てであると言うつもりはないが。ヤスパー

は次のように述べる。

「風景はニーチェの思想の背景をなしている。この背景の表現の無限の変化によって読者に語り、知らず識らずの間に読者の内にはいつてくるとき、それは一般に理解し易い言葉となる。そしてこの言葉の中にニーチェの本質の内容——彼の高貴、彼の純粹性、彼の運命——が隠されているようである。ここにニーチェの魔術と、すべての理解の前提であるところの気分へ通ずる最も容易な通路が存するのである。彼の世界においては、自然と気象は、単に直感的な絵画や聴かれる音楽の如きものであるばかりでなく、それ自身として直接に得るところの説明のできない現実的なものの典型の如きものである。」<sup>(39)</sup>

事物が避けようのない分り易さで表現されていると考え、思想に満ちた秋を見るニーチェを思う時、ヤスパースのこの言葉は示唆するところが多い。

#### 4

ニーチェにおける自然を考える時、古代ギリシアについての思想を考えなければならないのだが、「教育者としてのショーペンハウアー」の中では、それはほとんど表にあらわれない。しかし次のような表現がある。

「古代ギリシヤの哲学者たちの生存の価値に関する判断は近代的判断より遙かに重要な意味を持っている。なぜなら彼らは生そのものを豊満な完成において自分の前、自分の周りにもっていたからであり、彼らにあっては、われわれにおけるような思想家の感情が生自由、美、偉大さへの願望と、生存には一般にどんな価値があるか？ とひたすら問う真理への衝動とに分裂して混乱してはいなかったからである。」<sup>(40)</sup>

ここに生の豊満な完成をなしとげたギリシア人をニーチェは考えていたことが分るであろう。生の完成は自然の完成と同じ意味にとってよいであろうから、<sup>(41)</sup>自然を完成した人間が存在したという確信は、現在、未来において、自然を完成し得るし、これをなさねばならないという確信となるはずである。自然の完成という課題から離れた人間への激しい批判が全編を貫くのもそこにあると思われる。

ところで自然とは何かという問いの立て方からは、つまり形而上学的存在論として自然を見ようとするところから、ニーチェの自然は捉えることは出来ないようである。ニーチェにおける自然を考える時、この著作からは、人間は失敗した自然であるが、自然には思想に満ちた秋とも言うべき、光明に満ちた夏の夕があり、事物が避けようのない分り易さで表現されている自然があるという、ニーチェの確信が浮び上ろう。ニーチェにとって、ショーペンハウアーという人間を見出すことは、この確信と深く結びついているものと思われる。極めて困難な現代において、ショーペンハウアーに完成した自然を見ようとし、自然との稀有な合一を見ようとしたのであろう。しかし光明に満ちた夏の夕、思想に満ちた秋、事物が避けようのない分り易さで表現されている自然と言おうともそれは難解であり、完成した自然、模倣、崇拝すべき自然は深い謎である。

<註>

テキストは Friedrich Nietzsche, Werke, hrsg. v. Karl Schlechta, 3 Bde C. Hanser, München を用い、引用は理想社版「ニーチェ全集」全16巻別巻1を用いた。註はさきに Sとして Schlechta 版を、あとに理として理想社版の出典を示す。

- (1) S. III, 152 理. 14, 363頁
- (2) S. I, 298 理. 4, 206頁
- (3) S. I, 290 理. 4, 197頁
- (4) 註(2)参照
- (5)(6) S. I, 295 理. 4, 203頁
- (7) S. I, 297 理. 4, 204~205頁
- (8) S. I, 297 理. 4, 205頁
- (9) S. I, 298 理. 4, 206頁

K. レーヴィットは「神と人間と世界」(柴田治三郎訳、岩波書店)の中で「運命は恣意の自由とは異なって、意志を強要する自然必然的な必然存在(このようにあって別にはない在り方)を指示する。……運命は、現にあるようにあって別のようにありえない自然の領域に属する。」

(154頁)と述べている。「かくあらざるをえないからだ。」は自然との関連でとらえることが出来るであろう。

- (10) 註(6)を参照。
- (11) S. I, 289 理. 4, 196頁
- (12) S. I, 290 理. 4, 197頁
- (13) S. I, 294 理. 4, 201頁

- (14) S. I, 314 理. 4, 225頁
- (15) S. III, 310 理. 3, 297~298頁
- (16) S. III, 314 理. 3, 302頁
- (17)(18) S. I, 312~313 理. 4, 224頁
- (19) S. I, 323 理. 4, 236頁
- (20) ベルグソンは「哲学的直観」(ベルグソン全集7. 矢内原伊作訳, 白水社)の中で次のように述べている。これはニーチェやショーペンハウアーについて述べたものではなく、哲学的精神に関して述べたものであるが、「意志と表象との世界」が「伝えるものはたった一つ思想である。」という序で始まることを考えれば、決してニーチェ理解のためにも無縁なものとは思われない。
- 「……なにか単純なものが無限に単純なものがあまりに桁はずれに単純であるために、当の哲学者がそれを言うことに決して成功しなかったものがあります。」(137頁)
- 「哲学者という名に値する哲学者は未だかつてただ一つのことしかいわなかったのであります。いや彼が本当にそれをいったというよりむしろそれをいおうと努めたのであります。」(141頁)
- (21) ショーペンハウアー全集2 (白水社) 12~13頁
- (22) 小林秀雄全集8 (新潮社) 334頁 (ニーチェ雑感)
- (23) 註(16)参照
- (24)(25) S. I, 315~316 理. 4, 227~228頁
- (26) S. I, 316~317 理. 4, 228頁
- (27)(28)(29)(30)(31) S. I, 319 理. 4, 231~232頁
- (32) S. I, 320 理. 4, 233頁
- (33)(34) S. I, 326 理. 4, 239~240頁
- (35) S. I, 324 理. 4, 238頁
- (36) 「ニーチェの顔」(氷上英広著, 岩波新書) 69頁
- (37) "Nietzsche" 8Aufl. E. Bertram, H. Bouvier Verl, Bonn
- (38) S. I, 325 理. 4, 238~239頁
- (39) ヤスパーズ選集XIX (草薙正夫訳, 理想社) 215~216頁
- (40) S. I, 308 理. 4, 218頁
- (41) 「ニーチェ研究」信太正三著, 創文社 5~6頁参照

#### <補記>

本稿は „Schopenhauer als Erzieher” を問題としたが、今後も個々の作品を中心にしつつ、「ニーチェと自然」をテーマに考えて行くつもりである。そしてニーチェの発展をたどりたいと思っている。本稿は不完全ながら「ニーチェと自然」の(3)か(4)にあたるものとなる。 (11月25日記)